



白居易の諷諭詩について：
「與元九書」を通して見た「詩道」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-12-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加龍, 秀明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007825

白居易の諷諭詩について

「與元九書」を通して見た「詩道」

*加 龍 秀 明

白氏文集の巻一より巻四にかけて、諷諭詩と名付けて一百七十二首（序を除く）の詩をまず文集の最初に位置づけた白居易——ここに彼の詩に対する信念の並々ならぬ意図を伺い知ることが出来る。

さて、白居易の言う諷諭詩とは、一体いかなる意図を持つものであるか。

諷諭の「諷」とは「風」に通じ、古く「詩経」にその端を発す。

「毛詩大序」に

……故詩有六義焉。一日風、二日賦、三日比、四日興、五日雅、

六日頌。上以風化下、下以風刺上、主文而諷諭。言之者無罪、

聞之者足以戒。故曰風。……

とあるが如く、歌謡をもって上は下を風化するが如く教化し、下は上を風刺すなわちそれとなく諷めるのである。これが風の意味するものである。言い換えれば諷諭詩は当然政治的意図を主目的とするものであって、「詩経」それ自体がすでに儒者の原典である以上為政者の政治的遂行の手段として考えられ、文学として志向する詩ではあり得なかつた。

「白氏文集巻四・新樂府序」に

……爲君、爲臣、爲民、爲物、爲事而作、不爲文而作也。

と居易自身も諷諭詩のあり方を政治的、社会的問題の表現手段として捉えている。

さて、漢代において樂府（がくふ）音楽を司る役所）が設置され、忘れられていた各地の民謡の採集が計られるが、もはやその意味を持たず、やがてその意図するところは失われ樂府の詩（がくふのし）樂府（がくふ）で作られた詩）

としてその形式のみを残し、詩は文学としての美辞麗句の表現技巧に走り出すのである。かつての樂府（がくふ）役所）にて作られた樂府（がくふ）詩は、曲を伴って歌われた歌詞もその曲を離れ、魏晉・南北朝を通じて新しく目で見るとして製作され、政治的、社会的視点から離れ本来各地の民の声を聞くための歌謡という存在とは全く縁の無いものと化してしまった。漢代よりは賦がそして魏晉・南北朝頃から五言詩が盛んに行われて、宮廷貴族の遊戯的存在として隆盛を極め唐代に至るのである。

盛唐に入ると、古き樂府詩を新しい時代に則して再興しようとする気運が、その時代背景（科擧の制度などもその一例）のもとに生じるのである。元結や杜甫の詩の中にもその意図する詩が点在する。特に杜甫にあっては、自己の体験に基づく切実な叫びを諷諭詩に置き換え、「三吏」・「三別」やその他の歌行が新體樂府として、多くの詩人達の感動共感を呼び、律詩の完成と相俟って唐代随一の詩人として位置づけられるが、その背景に潜む理念の確認の明示、ないしはその意図するところの論理的表現は見られなかつた。

中唐に至る時、李紳・元稹・白居易らの一群の詩人達が新樂府運動なるものを提起し、ここに詩経の六義に基づく詩論の展開と相俟って諷諭詩の製作が行われることになる。白居易は、詩人として、そして儒者（為政者）として、その立場における「詩道」（詩に対する理念）を自己確認し、その裏付けを持って作詩するのである。古来より、詩に対する姿勢を明確に位置づけると同時にその詩論に基づく詩を数多く製作した詩人は、白居易において他には見られない。ただ彼の詩は集団の中において製作された論理的に働いて、杜甫のそれに比べる時感動性に欠けるものがあるように思われるが、かかる点については、次回の作品考察に譲ることにしたい。

さて、彼の諷諭詩は、彼四十四才（元和十年）以降鳴りを潜めるのであるがその歳、親友元稹に送った「與元九書」（白氏文集巻二十八）は、まさしくそ

れまでの彼の詩道（詩に対する理念）を明確に論述したものであり、白居易の諷諭詩を説明するに当たったの必見の文である。ここに「與元九書」が記された周囲の状況をまず述べ、次いでその論旨について解説を試みたい。

「新唐書」によれば、

…以母喪解、還拜左贊善大夫。是時盜殺武元衡。京都震擾。居易首上疏、請誅捕賊刷朝廷耻、以必得爲期。宰相嫌其出位不悅。俄有言居易母墮井死而居易賦新井篇言浮華無實行不可用。出爲州刺史。中書舍人王涯上言不宣治郡。追貶江州司馬。…

《母陳氏の喪に服して謂上に退居していた居易は、喪があけて都に帰り、太子左贊善大夫に任ぜられたが、時に宰相の武元衡が何者かに殺害されるという事件が起きた。長安の都は騒然となった。居易はこの時真先に上疏してすみやかに賊を捕えて朝廷の恥をすすぎ、必ず賊の逮捕をなし遂げねばならないと主張した。時の宰相は、居易の役職を越えた発言を越権も甚しいとして心よく思わなかった。その時突然「居易の母が井戸に落ちて死亡したにも拘らず居易は、新井編の詩を作るなど、言葉巧みであるが実行の伴わないことを言う人間で全く役に立たない。」と告げ口をする者がいた。そこで都から出されて江州の刺史（長官）になるはずであったが、中書舍人の王涯が「刺史として郡を治めさせるのもよくない。」と言上したので、居易は更に地位を下げられ江州の司馬（軍事担当の属官）として貶謫（へんたく）された。…》

とあって、この歳西暦八一五年、唐・憲宗の元和十年八月、居易四十四才であった。この「新唐書」の内容から察するに、当時すでに白居易の活発な言動に対してそれは諷諭詩も含めて上層官僚にかなりの反撥があったように見受けられる。

さて、この五ヶ月前の三月二十五日に親友の元稹が通州の司馬として左遷さ

れた。元稹は任地に赴くに当たってその詩集二十巻を白居易の手許に留め置いた。同地に着任するや元稹は白居易に対して、「叙詩寄樂天書」（元氏長慶集卷三十）を送ったのであるが、元稹の詩集二十巻に刺激を受けた白居易自身も

…凡爲十五卷。約八百首。異時相見、當盡致於執事。…
（與元九書）

と述べている如く、十五巻の詩集を編纂すると同時に元稹に対する返書として「與元九書」を送った訳である。この白居易の詩集十五巻は、彼四十四才までの詩の総決算であり、片や「與元九書」は、その信念とする「詩道」の総括でもあった。

ところで、「與元九書」は、自己の信念に基づいて為政者としての正義を主張したにも拘らず、それが却って江州司馬左遷という憂き目に遭遇した事に対する悲憤を、同じ境遇に置かれた親友元稹に訴えたいという思いをその背景にして、これまでの白居易の「詩道」の正当性、詩に対する彼の姿勢の正さを元稹に語り掛けることにより、共感を得ると同時に白居易自身の詩に対する理念の自己確認の場ともなっている。その意味でも、白居易の詩に対する思いは如何なる上で最も重要な資料ともなり得る。一体、白居易の詩に対する思いは如何なるものであったか。「與元九書」の論述に則してその要点の解説を試みようと思う。

「與元九書」は、最初に元稹に書を送るの経緯を述べ、次いで白居易自身の詩論の展開が始まる。

…夫文尚矣。三才各有文。天之文三光首之、地之文五材首之、人之文六經首之。就六經言詩又首之。…

《…そもそも文なるものはその昔から存在するものである。三才（天・地・人）にそれぞれ文があり、天の文では三光（日・月・星）がその中心であり、地の文では五材（木・火・土・金・水）がその中心となり、人の文の場合は、六經（詩・

書・易・春秋・礼・楽）がその中心であるが、六経について言
うならその中でも詩経が最も重要な位置を占めるのである。》

という言葉をもって論旨を展開していく。人間社会で六経が文として尊ばれなければならぬと言うのは、儒者たる為政者の心である。その中でも詩経すなわち詩をもってその中心とせよと言う。

・・・何者、聖人感人心而天下和平。感人心者、莫先乎情、莫始乎言。莫切乎声、莫深乎義。・・・

《何故かと言つと、古代の聖人君子は人民の心を感化して初めて天下が治まるのである。人民の心に感動を与える為には感情に訴えるしかなく、言葉で何を表現するかが根本で、音声を切実なものにし、意味内容を深めるしかない。》

すなわち、詩は天下国家を安泰ならしめる為の道具であり、人民を感化する為の手段でもあるという。人民に感動を与えるには感情が重要でそれをどう言葉で表現するか、又音声も意味内容も深く考えられなければならない訳である。この役目を果たすのが詩であり、これ等の条件が兼ね備わっているのが詩経の三百篇なのである。すでに詩は為政者たるものにとって最も重要な存在意味を持ち、政治と切り離せないものとして意識されているのであって、これは白居易の詩に対する基本的姿勢を意味する。古代の聖天子がその心をもって、詩を通して人民の心を和げ、詩を通して人民の心を知り、すぐれた政治を行ってきた事、すなわち歴史的事実を訴え、天下国家の安泰という政治的、社会的な機能を持つ存在として詩の重要性を説くのである。

・・・言者無罪、聞者足戒、言者聞者莫不兩盡其心焉。洎周衰秦興、採詩官廢、上不以詩補察時政、下以詩洩導人情、乃至於詔成之風動救之道缺、於時六義始剝矣。

《詩を歌う者に罪は無く、聞く者にとっては戒めとなるので

あって、言う者も聞く者も両者ともに十分に心を尽くし、上下の心は通じ合うのである。ところが周が衰え秦の時代に採詩の官が廃止されて、上は詩を取り上げて時の政治を反省することもしせず、下は詩をもって人情を訴えようとしめない。そこで他人の気に入るような心にもない詩を歌う風潮となり、誤ちを正す道が見られないようになった。ここに六義（比・賦・興・風・雅・頌）が始めて損なわれてしまった。》

と言つのである。これは先に述べた「毛詩大序」の一節を念頭に置いての表現である。三代（夏・殷・周）三王（禹・湯王・文王）の時代こそ最も尊敬し得る時代であり、彼の理念を実証し得た存在でもあった。ここで白居易は、歴史を振り返り、秦よりこの方、彼の理想とする詩すなわち詩経の六義に基づく詩歌が廃れたるを繰々陳述する。詩経の六義の精神が欠落して行く一方で華麗なる詩歌を呼び起し、やがて唐代における現状に到達する。

・・・唐興二百年、其間詩人不可勝數。所可舉者、陳子昂有感遇詩二十首、鮑勣有感興詩十五首。又詩之豪者世稱李杜。李之作才矣奇矣。人不逮矣。索其風雅比興十無一焉。杜詩最多、可傳者千餘首。至於貫穿今古、觀緯格律、盡工盡善、又過於李。然撮其新安吏・石壕吏・潼關吏・塞盧子・留花門之章・朱門酒肉臭路有凍死骨之句、亦不過三四十首。杜尚如此。況不逮杜者乎。僕常痛詩道崩壞、忽忽憤發。或食輟哺、夜輟寢、不量才力、欲扶起之。・・・

《唐の開国より今日まで二百年間に多くの詩人が輩出した。その中で取り立てて言えば、陳子昂の感遇詩二十首や鮑勣の感興詩十五首が目につく。又、詩の大家と言えば、世間では李杜の名を挙げる。李白の詩は勝れ、奇抜であって、到底他の詩人の及ぶところではない。しかし六義の面から言うなら十に一つもそれに適った詩は見受けられない。杜甫の詩は非常に多く、今日に伝わるもの千余首あって、古今の道を学び尽し形式を整

え、その巧みを尽す点では李白より上である。しかし、その杜甫であつてさえ、彼の作品「新安吏」「石壕吏」「潼關吏」「塞廬子」「留花門」の章や「朱門酒肉臭、路有凍死骨」の句と拾い挙げてみても、六義に適つたものは三四十首に過ぎないのであつて、杜甫にしてこの有様である。まして杜甫に及ばない詩人にあつては言つて及ばない。私はこの詩道の崩壊を悲しみ、失意のあまり憤りを発して、寝食もやめて、自分の能力も顧みず正しき詩道を扶け起こそうと思つたのである。》

と記し、唐の時代にあつて杜甫にその諷諭の精神を垣間見るのみであつて、誰として「詩道」を正そうとしない時、その精神を心に秘め、正しき「詩道」の再興を宣言するのである。

ここで白居易は、詩の歴史的な流れを重視し多く紙数を費やしている。何故歴史的な事実を重んずるのか。

・ ・ ・ 毎讀書史、多求理道、始知文章合爲時而著、歌詩合爲事而作、・ ・ ・

《いつも歴史を読んで、その道理を追求してきたが、文章は現実的な立場で、詩歌は具体的事実をもって作らねばならないことをやっと知った。》

白居易は、まず理念を裏付けるものは歴史的事実であると言つて、その歴史的事実を学ぶことより始めて確固たる理念を抱き得るのである。その結果、文章詩歌は現実的、具体的事実をもって描かれねばならぬ。とりわけ詩歌において現実を眼に向け、その事実を歌わんとすれば、それを取りも直さず諷諭の詩に帰着する。

さて、彼が歴史的流れを詳述しているのは、彼自身の理念の自己確認であると同時に秦以降の「詩道」の退廃を歴史的事実をもって批判していることにもなる。

次いで白居易は、自己の幼き頃より刻苦勉勵すると同時に益々詩歌の道に励

んだ姿を思い、又、翰林院在職中を振り返り、いかに諷諭詩に力を入れたかを力説する。

・ ・ ・ 擯在翰林、身是諫官。啓奏之外有可以救濟人病禱補時闕而難於指言者、輒詠歌之。・ ・ ・

《かくして自分は翰林学士に抜擢されて諫官となり、多く諫言文を提出した。天子に啓奏する外にも、世の中の乱れを正し政治の誤りを補い助けるべき事があつて、直言するのを憚る時にはすぐに詩歌にて現わしたのであつた。》

すなわち天子の制誥の草案を作り、天子に対する諫言(かんげん)を奏上する役職上の務め以外に諷諭の詩が作られたことを意味する。白居易は元和二年に翰林学士を授けられ、翌三年に左拾遺の職にあつて、職務を全うせんと努力する。しかしそれに満足できず、詩をもってその意を表そうとし、この頃までにはすでにかんがりの諷諭詩が発表されていたものと思われる。

さて、喜怒哀楽の感情の表出の甚しい白居易が現実の不正、矛盾を事実として描くのであつてみれば、その詩文たるや相手方に痛烈に聞こえたのであろう彼に批判された高級官僚達は一斉に彼に反撥し出した。

・ ・ ・ 凡聞僕賀雨詩、而衆口籍籍已謂非宜矣。聞僕哭孔戡詩、衆面脈脈盡不悅矣。聞秦中吟則權豪貴近者、相目而變色矣。聞樂遊園寄足下詩則執政柄者扼腕矣。聞宿紫閣村詩則握軍要者切齒矣。大率如此不可偏舉。・ ・ ・

《僕の「賀雨」の詩を聞くと皆騒ぎ立ててけしからんと言つし、僕の「哭孔戡」の詩を耳にすると怒りを表わして不愉快な顔をする。「秦中吟」を聞くと権力者や天子の側近にある者は、互に目配せして顔色を変え、「樂遊園寄足下」の詩を耳にすると政權を手にする者は、怒りに震え、拳を握りしめ、「宿紫閣村」の詩を聞くと軍部の要人達は、齒軋りをして私を強く非難

した。おおよそこの様な有様で全てを挙げる事ができない程だ。》

と述べているように、つまり白居易の諷諭詩は一方で彼の思惑通り反響があった訳であるが、しかし又一方では、彼の詩に対するかなりの非難があったようである。加えて妻子までも彼に対して批判的であったと記している。今や彼の詩を理解してくれる者は、「举世不過三兩人」と言い、それ等の人々も次々に死んで元續のみがよき理解者として存命していると嘆く。白居易は言葉が続けて次のようにも言う。

・ ・ ・ 抑又不知天之意不欲使下人之病苦聞於上耶、不然、何有志於詩者不利若此之甚也。・ ・ ・

《一体、どうして天は人民の苦しみを天子に伝えようとしなのか自分には分らない。そうでなければ、どうして詩に志す者がこのような憂き目を見なければならないのか。》

と天意に対しても懷疑と憤りの念を抱くのである。時あたかも武元衡暗殺事件に上疎し、越権の罪により江州司馬に左遷された直後であつてみれば、その悲憤も想像以上であつたと思う。しかし、一方で文名高く、自分の詩が広く世人に詠じられたことを述べる。

・ ・ ・ 及再來長安、又聞有軍使高霞寓者。欲聘倡妓。妓大誇曰、我誦得白學士長恨歌。豈同他妓哉。由是增價。又足下書云、見江館柱間有題僕詩者、復何人哉。又昨過漢南日、適遇主人集衆樂娛他賓、諸妓見僕來、指而相顧曰此是秦中吟長恨歌主耳。自長安抵江西三四千里、凡鄉校佛寺逆旅行舟之中、往往有題僕詩者。士庶僧徒孺婦處女之口、每有誦僕詩者。・ ・ ・

《再び長安に来てみると、軍使高霞寓という者が倡妓を呼んだ時、その倡妓が言うのに、「私は白居易の長恨歌を暗誦でき

るので他の妓女と違うのですよ。」と。そこで代価を高く支払ったという。又貴方の手紙に江間の柱のあたりに私の詩が書かれてあったとか。果たして誰が書いたのだろうか。又以前漢南を通った日、偶然主人がお客を呼んで娘ませた時に倡妓が私を見つけ指して、「この人が秦中吟や長恨歌を作った人ですよ。」と言った。長安から江西の三四千里の間、学校、寺院、旅館そして舟の中に私の詩を書き付けてあつて、役人から一般の大衆そして僧侶、未亡人、乙女に至るまで私の詩を歌っているものがあった。》

存命中からこのように詩人としての名譽を博したことを誇らしげに思っているのであるが、彼自身どうも納得できない。何故なら人の口に登ったのは、諷諭詩もさることながら長恨歌等の感傷詩がその中心であつたからである。ここに白居易は、再び詩に対する立場を明確にする。

・ ・ ・ 自拾遺來、凡所適、所感、關於美刺興比者、又自武德訖元和、因事立題、題爲新樂府者共一百五十首、謂之諷諭詩。又或退公獨處、或移病閑居、知足保和、吟詠情性者一百首、謂之閑適詩。又有事物牽於外、情理動於內、隨感遇而形於歎詠者一百首、謂之感傷詩。又有五言、七言、長句、絕句、自一百韻至兩韻者四百餘首、謂之雜律詩。凡爲十五卷、約八百首、・ ・ ・

《拾遺の官についてより、心に適する所、感ずる所の詩で詩經六義に適つたものに、武徳より元和に至るまで、その事実に従つて題を付け、新樂府と名付けたものと合わせて百五十首、これが諷諭詩なのである。又官職を退いて暮らし、あるいは閑居し、足るを知り心の和を保つてその思いを述べた詩が百首、これが閑適詩なのであり、又、外物に引かれて心が動きその感ずるがままに歌つた詩が百首、これを感傷詩という。又、五言、七言、長句、絶句取り交せて一百韻から兩韻まで四百余首あつてこれを雜律詩と名付ける。全てで十五卷、八百首。》

ここで白居易の作品(詩に限る)は八百首を数え、諷諭詩、閑適詩、感傷詩(以上古体詩)と雑律詩(近体詩)の四体に分類されている訳で、意識して諷諭詩を最初に位置付け重要視するこの分類は、後の文集編纂にも変更されることはなかった。彼の儒者として、為政者としての立場を詩集編纂にも明示している訳で、又、次のようにも言う。

・・・古人云、窮則獨善其身、達則兼濟天下。僕雖不肖、常師此語。——中略——故僕志在兼濟、行在獨善。奉而始終之則爲道、言而發明之則爲詩。謂之諷諭詩、兼濟之志也。謂之閑適詩、獨善之義也。故覽僕詩知僕之道焉。其餘雜律詩、或誘於一時一物、發於一笑一吟。率然成章、非平生所尚者。——中略——今僕之詩、人所愛者、悉不過雜律詩與長恨歌已下耳。時之所重、僕之所輕。至於諷諭者、意激而言質、閑適者、思澹而詞迂。宜人之不愛也。・・・

《古人が、「役人としての職を退いた時には自身の修養に励み、その地位があれば天下を治めることを信条とせよ。」と言う。自分は非力ではあるがこの言葉を目標としている。

——中略——だから私の志は兼濟にあり、行いは独善にあって、命を奉じて終始する時道となり、言葉で明らかにする時詩となる。これを諷諭詩と呼ぶ時は兼濟の心であり、閑適詩というのは独善の意味なのである。だから私の詩を見たら私の道を知ることになる。いささか外物に心を動かされ感情を少しく表わしただけで、すぐに詩ができて、これは私の平生の重んずるところの詩ではないのだ。——中略——今僕の詩の中で人々が愛するのは、雑律詩と長恨歌等の詩のみであって、当世の人々の重んずる詩は却って私の軽んずるところのものである。諷諭の詩は意とするとところ激しく、言葉は素朴で飾らない。閑適詩はその心が静かで、言葉は遠回しな表現である。だから人々が愛せないのも当然なのかもしれない。》

当時流行の物語り(唐伝奇小説)を背景として成り立つ長恨歌などの感傷詩に人々の注目が集ったが、白居易は為政者として儒学的文学観の上に立つことを明言して、詩経六義に基づく詩すなわち諷諭詩を最初に、そして儒者としての生き方の反面すなわち閑適詩を次に置いている。彼の諷諭詩は、かかる観念的な論理の裏付けがあつて製作される。これは以前のいかなる時代のいかなる詩人にも見られなかった特色でもあるが、理念が感情以前にあつて、感情が理念により制約される嫌いがある。この点が惜しまれる。

さて、白居易の「與元九書」の意図するところをまとめると、——儒者たる者すなわち政治に携わる者は時の政治を扶け起こすべく詩の政治的機能を重要視せねばならない。その源は古き時代(周以前)にある原型を見ることが出来る。儒者の原典の一つである詩経がそれである。その詩経の六義に基づく詩が時代とともに廃れ、今日に至ったことを嘆き、その根本に立ち返り諷諭の詩を製作することを第一義とする。世間の批判、評価がいかにあれ、自らの重んずるところを主張し、無二の親友元稹にその真意を訴えたのがこの書であつた、同じ境遇に置かれていた親友元稹に対して、江州司馬左遷の悲憤を訴えている白居易の心情が強く感じられる。

ところで彼の四十四才以降、諷諭詩の製作は見られない。恐らくは外圧の厳しさを自覚した故であろう。従つて諷諭詩と位置付けられた詩は百七十二首のみで、元和四・五年を中心に元和十年(四十四才)までの作である。この中に「新樂府」と題した五十首の詩がある。元來樂府は民の心情を現した歌謡であり、上たる為政者が下なる人民の声を聞きその政治を正すものとしてあつたことは前にも述べたが、その元來の意味を失つた樂府が唐代に入るや詩人達の口に上がるようになり、盛唐の元結に「系樂府十二首」があり、杜甫にあっては「三吏」・「三別」など新體樂府と呼ばれる一群の詩が製作され、新しい社会問題を批判的眼で追求する詩風が見られた。更に中唐に入ると張籍・王建が現われ、杜甫のあとを受けて社会問題を取り上げ、一般民衆の苦悩に満ちた姿を描く詩も作られるが、このような雰囲気の中で白居易の詩人仲間でも新樂府運動を提起するようになる。まず元和三年頃、李紳が「樂府新題」二十首(現存しない)を元稹に贈り、元稹は「和李校書新題樂府」十二首をもってこれに応えた。この元稹の十二首の詩に対して、元和四年に白居易は首数を増して「新樂府」五十首を製作する訳である。

さて、「新楽府」の序に白居易の「詩道」に対する一端を伺い知ることができらる。

序曰、凡九千二百五十二言、斷爲五十篇、篇無定句、句無定字、繫於意、不繫於文。首句標其目（古詩十九首之例也。）卒章顯其志詩三百之義也。其辭質而徑欲見之者易論也。其言直而切欲聞之者深誠也。其事覈而實使采之者傳信也。其體順而律可

以播於樂章歌曲也。總而言之、爲君爲臣爲民爲物爲事而作、不爲文而作也。

（注）（ ）内他本により補う。律は肆を他本により改む。

と述べている。九千二百五十二字を五十首に作り、文章を飾らずその意味内容に重点を置き、楽府の古典とさる漢代古詩十九首の形態を尊重すると共に、詩経の精神を今表現しようと言うのである。辞・言・事・体の基本的な姿が失われている点を意識して、それを明確に打ち出す。見る人が理解し易いように、辞すなわち言葉は飾らずすぐに理解できるようなものを用い、聞く人が深く戒めることを望んで、言すなわちその句の意味を正直に切実に述べている。又、この詩をいつの日か見る人をして後代にその真実を伝えさせる為に事すなわち題材は明白な事実（歴史的事実）を採り上げている。そして楽府として歌えるように、体すなわち形体は順序よく律的に並べ一首を構成してあると言う。これは楽府本来の在り方を明確にしたものであり、その意に添って五十首が製作されていることを示す。最後に君・臣・民・事・物の五者が乱れる場合、調和は失われ天下は乱れる。その故に君・臣・民・事・物の為に楽府を作ったのであり詩の美しさを目的として作ったのではないと言う。とにかく天下国家の為にこの「新楽府」を歌い上げたと言調する。恐らくこの「新楽府」五十首の製作をもって、白居易の諷諭詩における理念がほぼ固まり自己認識するに至ったと思われる。

さて、「與元九書」は「新楽府序」に後れること六年、それを更に歴史的事実に照らして敷衍的に記述したものであって、白居易の「詩道」の再確認あるいはその時点における彼の揺るがぬ詩に対する信念の表示であった。

以上、「白居易の「詩道」（詩に対する理念）」とは何かを「與元九書」を通し

て述べて来たが、次回において、白居易の諷諭詩の個々の作品についての考察を述べることにする。

参考文献

- 汪立名「白香山詩集」・隅草堂版・清康熙十年
 白居易「白香山集」・文学古籍刊行社・一九五四年初版
 平岡武夫・今井清校定「白氏文集」・京都大学人文科学研究所・昭和四十六年
 佐久節「續國譯漢文大成・伯樂天詩集」・国民文庫刊行会・昭和四年
 鈴木虎雄「伯樂天詩解」・京都弘文堂・昭和二年
 花房英樹「白居易研究」・世界思想社・一九七一年
 花房英樹「白氏文集の批判的研究」・京都中村印刷出版部・昭和三十五年
 Waley, A "The Life and times of Po Chü-i" N. Y. Macmillan Co. 1941
 楊泗孫「宋本十三經注疏附校勘記・毛詩」・望仙館石印・清光緒丁亥
 蕪氏刊本「四部叢刊・元氏長慶集」・上海涵芬樓・明嘉靖壬子
 胡克家「孫批胡刻文選」・同文書局石印・清光緒戊子
 仇兆鰲「杜氏詳注」・大文堂刊・清康熙三十二年
 「百衲本二十四史・新唐書」・北宋嘉祐刊本・台灣商務印書館
 小川環樹「唐代の詩人」・大修館書店・昭和五十年
 前野直彬「中国文学史」・東京大学出版会・一九九一年
 松浦友久「白居易の文学論」・尚学図書（漢文研究シリーズ）昭和五十三年

要 旨

唐に至るまでの詩人達の中にも諷諭詩を散見することができるが、それは詩における理念としての自己確認を持つ程のものではなかった。しかし中唐に入ってからややく詩の第一義は諷諭の詩であると理論づけ、詩に対する理念を明確に示した詩人が白居易であった。その信念の表明は「與元九書」に詳しい。今、この「與元九書」を通して、彼がいかにその前半生（四十四才迄）において諷諭詩を重んじ力を注いだか、すなわち彼の「詩道」について解説を試みた。

一九九三年四月九日受理

* 一般教養科